令和５年度　伊那市立伊那西小学校評価表

学校関係者評価；（A：十分達成された　B：ほぼ達成された　C：不十分であった）　自己（項目間相対を加味した到達度）評価（a：十分達成された　b：ほぼ達成された　c：不十分であった）

学校教育目標	重点目標（中長期的目標）
「かしこさ」「やさしさ」「たくましさ」 ～知・徳・体の調和のとれた人間形成～	「林間はぼくらの教室だ」「根っこを肥やすふるさと教育の創造」 伊那西の豊かな自然と文化、人才を最大限に活用した『自然教育』『ふるさと教育』を柱にして、地域に開かれた学校を目指し、体験を通して『豊かな知性と確かな学力』『豊かな人間性』『たくましい心と体』のバランスのよい子どもを育てる

総合評価

○伊那市の教育理念「はじめに子どもありき」を原点とし、「林間を活用した教育活動」「一人一人を大切にした教育活動」「地域と連携した教育活動」の３本の柱で教育活動を実践した。
　林間の活動では、各学年が取り組む活動に加え、全校縦割り班による「私たちの林間づくり」に年間通して取り組んだ。県林業センターや林務課、地域で木材に関わる仕事をしている専門家を招聘し、子どもたちが行う作業に意味づけをすることで、マラソンコース整備などの活動に課題を持って主体的に取り組むことができた。また、今年度も危険木として伐採を行わなければならない場面があったが、切り倒した後の木材を有効活用して使い続けていくことも作業を通して学ぶことができ、森の循環に関わる内容にも踏み込むことができた。さらに今年度は５年前に今後の計画として定めたエリアの皆伐を行い、長い期間の変化も観察していくことを継続できた。その学びにおいては、専門家だけでなく保護者や地域の方々の意見や活動の支えを受けて成り立たせることができたのも、今後の継続的な活動につながっていくと考える。加えて本年度は教育課程研究協議会の公開授業と伊那中学校区保小中公開授業において、林間を題材にした学びを全校で研究した。教育課程の理科では林間の動植物のつながりを食物連鎖の観点から考え、伊那西小の特長を生かした学びを公開することができた。
　これらの活動が評価されて、今年度は博報堂教育財団が主催する博報賞を受賞することができた。今後も林間を中心的な題材に据えながら子どもたちが本物に触れて考える学びを大切にしていきたい。
○保護者を対象にした「学校生活に関するアンケート」では、「地域に開かれた学校となっており、行きやすく話しやすいと思いますか」「学校職員は、保護者の相談や問い合わせに丁寧に応じていますか」の項目の評価が大変高かった。保護者の気持ちに寄り添いながら保護者の思いを丁寧に聞くこと、学校での子どもたちの姿を積極的に伝えていくことを教職員一丸となって取り組んできたことの成果だと思われる。

今年度の重点目標	成果と課題	評価	改善策・向上策
～これからの時代に生きる子どもたちを育てる学校であるために～ (1)　子どもと教職員が共に学ぶ：不易と流行、バランスを持って人として学び続ける姿を	(1)これからの時代に生きる子どもたちを育てる学校であるために、教師自身が今まで持っていた教師観・子ども観・授業観のままでは対応できないことを校長が職員会議で何度も職員に向けて話をした。特に「探究」「ICT 機器の効果的な活用」の大切さについて、職員の意識が変わってきていることが大きな成果である。夏休みに行われた ICT 研修に ICT を苦手とする職員が積極的に参加したり、良いアプリを教え合ったりなど自分から新しいことを学ぼうとする職員集団に成長している。 　自然、地質、登山、哲学、ものづくりなど、職員自身が自分の学びたいことを生き生きと学ぶ職員集団である。Well-being の実現に欠かせないことであると感じる。	A b	○教師自身が今までの経験から得た教師観・子ども観・授業観を大切にしながら、それだけではこれからの時代に生きる子どもたちを育てる学校にはならないことを理解し、意識改革に努め、さらに研修を重ねたい。 ○教師自身が、生き生きと学び続けることができるために、時間外勤務の縮減は喫緊の課題であるので、子どもたちに必要な学びと伊那西小ならではの学びを大切にしつつ、学校・保護者・教職員の負担を考慮しながら日程や職員の行事や日常活動を見直して計画する。
～これからの時代に生きる子どもたちを育てる学校であるために～ (2)　全職員が児童を共通理解で：小規模特任校としての特長をふまえた個別最適な指導を研究	(2)小規模特認校となり６年目を迎えた本校は、不登校傾向、発達障害等、きめ細やかな支援を必要とする児童が大変多い現状である。一人の子どもも取り残されない「多様性を包み込む」学校づくりに向け、担任一人で抱えるのではなく全職員で児童を共通理解し支援の方向を考えることができた。（毎週行う学年会全体会・月に１度行う支援委員会） 　教師主導の一斉授業から、子どもの「問い」を大切にした授業、その子のペースで学習できる授業、体験を通して学びを深める授業、ICT の効果的な活用など、職員一人一人が授業改善に取り組んだ。	A a	○小規模特認校として、多様な困難・悩みを抱える児童・保護者が今後も増えていくことが予想される。学校は、一人一人に寄り添い、丁寧に話を聴く。すべての児童が自分らしく学ぶことのできる学びの在り方を研修・研究し、多様性を包み込む学校づくりをさらに推進したい。 ○多様な学びの場として、中間教室、民間施設との連携も積極的に行っていく。
～これからの時代に生きる子どもたちを育てる学校であるために～ (3)　林間で学ぶ伊那西小学校：今しかない時間に、ここでしかできない経験と学びを	(3)林間での学習における３本柱「全校児童で取り組む私たちの林間づくり」「学年ごとに取り組む太陽の時間・生活科」「日々の授業で林間を活用した教科学習」を全職員が共通認識しながら子どもたちと学びを深めた。全校縦割り班で行う年２回の「マラソンコース整備活動」、一昨年から継続している「アカマツの保護活動」、ネイチャーゲーム・飯盒炊爨をしながら林間の素晴らしさを感じる「林間と親しむ日」など、どれも体験を通して伊那西小学校でしかできない豊かな学びを深めることができた。また、築後３年経過した森の教室を全校で清掃し学びの環境に感謝の気持ちを持った。シイタケ栽培の原木となるコナラの伐倒では、全校皆でロープを引き、簡単には倒れない１本の木の命の重みを全校で感じ合った。学年ごとに取り組む活動として、６年生は林間で摘んだキイチゴを使ってジャムを作り、伊那祭りで販売することを通して、伊那西小学校の林間の魅力を広く地域の方に伝えることができた。	A a	○学校林が日本一学校の近くにある伊那西小学校である。教室の中での学びから、教室を飛び出し、林間で学ぶ伊那西小学校であるために、まず教師自身が林間の魅力を感じたい。そして子どもたちの願い、問いから授業や活動を構想したい。 ○本年度もたくさんの地域講師にお世話になりながら学びを深めた。来年度も積極的に地域講師を招聘していく。
～これからの時代に生きる子どもたちを育てる学校であるために～ (4)　伊那中学校区保小中連携：「枠」を問う　１５年間の子どもの育ちの中核として考える	(4)11/30 伊那中学校区保小中公開授業を行い、長野県内各地から 25 名ほどの参観者が来校した。野鳥研究家である戸谷省吾先生を講師に、厳しい冬を生き抜く鳥についてお話をお聴きし、全校でバードケーキ作りに取り組んだ。昨年までのバードケーキ作りは全員が同じ材料を使ったが、本年度は、自分が来てほしいと願う鳥に向けて、その鳥にあった材料（分量）でバードケーキ作りに取り組んだ。 12/18 伊那市授業作り研修会で、伊那中学校、伊那小学校の先生方と授業実践について情報交換を行った。特に、中学校の取り組み（学力、テストの内容、宿題、授業の振り返り場面）について学ぶことができ、来年度の本校の研究にもつなげたいと大きな刺激を得た。 11/7 竜西保育園公開保育、1/22 伊那中学校・2/3 伊那小学校の公開授業を１校以上全職員が参観し、他校の実践から自分自身の授業のあり方を振り	B b	○「伊那中学校保小中連携」を来年度も大切にしていく。公開保育、公開授業に積極的に参加し、他校の実践から学びを深めたい。 ○「枠を問う」の「枠」は、「教師の枠」である。何よりも教師自身の意識改革が必要である。来年度の本校の公開授業は、さらにここを意識したい。 ○本年度初めて、中学校区で「学力」について話をすることができた。今後も継続していき、伊那市全体で進めている学力向上委員会による方策と伊那中学校区としての学力向上策を統合して、子どもたちがこれからの時代に必要な学びを考え反映させていきたい。

				返る機会とした。大変貴重な参観となった。		
領域	対象	評価項目	評価の観点	成果と課題	評価	改善策・向上策
教育活動	学習指導	○思考力・表現力・判断力の育成 ・主体的・対話的で深い学びを目指した授業研究 ・ICT 機器の効果的な活用 ○基礎的・基本的な学力をつける ・iPad を活用したドリル学習	○１時間の授業を「ねらい」「めりはり」「見とどけ」を意識して授業を行っているか ○児童の「問い」を大切にした授業作りを行ったか ○グループ学習・ペア学習を位置づけ、子ども同士の対話を深める中で「主体的・対話的で深い学び」を目指した指導ができたか ○ＩＣＴ機器を効果的に使用することができたか	○教師が学級の児童を思い浮かべながら地道に教材研究をし、「ねらい」を明確にした１時間の授業構想を立て授業に臨むことができた。 ○知識を教える授業から、子ども自身が「問い」を立て、自分自身で、また仲間と共に考え合いながら課題を解決する授業に、学校全体が少しずつ変わってきたことが大きな成果である。 ○日課の中に基礎的な計算力や書く力の定着をねらいとした「チャレンジタイム」を組み込み、学年ごとにドリル等の繰り返し学習と指導を充実させている。AI ドリル「スマイルネクスト」を利用し、児童が自分のペースでドリル学習に取り組むこともできた。 ○６年生は「全国学力学・学習状況調査」で、国語・算数共に県平均・全国平均を大きく上回った。これは単なる知識で答えられる問題ではなく、林間での体験的な学びから自分の持てる知識をフル活用して問題に取り組む６年生の力が表れた結果であると感じている。	B b	○教師主導の授業から、児童の「問い」を大切にした探究的な学びに大きく舵を切りたい。まずは、教師の意識改革。 ○来年度、研究部会として「授業改善」部会を設ける。 「個別最適な学び」「協働的な学び」「探究的な学び」について、実際の授業作りを通して研究を重ねたい。 ○ＩＣＴ機器を日常の道具として使用することを定着させ、個別最適な学習につなげていく。
	教育課程	○一人ひとりを生かす授業の創造	○児童・学級・学校・地域の持ち味を生かした特色ある教育活動を展開できたか	○総合的な学習の時間や生活科では、林間・地域素材を教材化して、子どもたちの願いの実現に取り組み、子どもたちの内に成就感や自己肯定感を大きく育むことができた。	A a	○教職員は、児童の内に確かに育っている力を注意深く見取りたい。そして認め、励ましの言葉を伝え続けたい。
	生徒指導	○心のふれあいを深める生徒指導	○児童一人一人が存在感・所属感の持てる学級の組織づくり・人間関係づくりを図ることができたか ○特に心を寄せる必要のある児童について、全職員の共通理解のもとに一貫性のある指導ができたか ○児童理解に係る報告・連絡・相談を実行しているか	○学級づくりの基盤になる児童理解の視点を確かにするためのＱ－Ｕ研修が定着してきている。結果について職員全体で分析し、学級経営に生かすよう心がけた。今後も児童理解に努めたい。 ○特に配慮を要する児童については、毎週の学年会や月１回の支援委員会で情報を共有したり、適切な支援を検討したりする中で共通理解に努めた。 ○不登校傾向の児童について、無理に登校刺激は行わないものの、担任が家庭訪問を続けたり、中間教室や民間施設、医療機関とも連携をとったりしながらその子のための支援を全職員で考え対応することができた。	A a	○Ｑ－Ｕや発達障害に関わる研修を引き続き行い、学級経営における人間関係作りの実践につなげられるよう力量を高めていく。また、場合に応じて、チームで関わる体制を作り取り組んでいく。 ○小規模特任校として、不登校傾向や発達障害等、配慮が必要な児童が大変多くなってきている。教職員は、児童一人一人に温かく寄り添いたい。また学校だけで抱えるのではなく、中間教室、子ども相談室、民間施設、医療等と積極的に連携をとっていく。
		○開かれた学級経営の充実と深化	○子ども一人一人を受け入れ、子どもとの信頼関係を築くことができたか ○いじめの防止・早期発見に取り組み、子ども同士の温かい人間関係をつくることに努めたか	○子どもの足りないところを指摘するのではなく、その子自身のよさから出発する児童理解へと学校全体が進んでいることが大きな成果である。 ○毎学期友だちとの関係を確認するアンケートを実施したり、月ごと児童の様子を記入するカードを用いたりして、いじめの早期発見とその防止に取り組んできた。気になる児童については、担任と相談の上、個別に懇談を行ったり、スクールカウンセラーと話しをする機会を設けたりした。特に本年度は全校児童がスクールカウンセラーとショートカウンセリングを実施することができ、担任の気付かない児童の思いを知ることができた。	B b	○「児童と向き合う時間」を計画的に設けて、児童と話をしたり寄り添ったり関わる機会を増やすなどしながら児童理解を進め、児童の些細な変化を見逃さないように取り組んでいく。 ○教師の人権感覚を磨く研修や、いじめ防止に関わる研修を実施していく。 ○児童がスクールカウンセラーのショートカウンセリングを受ける機会を設けたことで、自分の心の中にある感情を出せ、心理的安定につながった。また担任の児童理解にもつながった。今後もスクールカウンセラーによるショートカウンセリングを継続していく。
学校運営	安全	○校内、校外、通学路に関わる安全確保	○災害、不審者、交通事故、野生動物に係る危険から、児童の安全を確保する取組は充分であったか	○熊の出没状況について、PTA・区長・信大教授と随時連絡を取りながら児童の安全を第一に対応をすることができた。 ○信州大学瀧井暁子先生を講師とする「熊の学習会」は隔年開催のため本年度は実施しなかったが、熊の出没情報については何度も連絡を取り合い、瀧井先生のご助言をもとに熊バスの運行等を決めることができた。 ○火事や地震発生時に関わる避難訓練を実施し、その対応と身の守り方について学習できた。昨年度に引き続きスクールサポーターを講師として防犯訓練も行い、不審者への対応を学ぶことができた。 ○年 2 回、春と秋に交通安全教室を実施した。歩行の練習や自転車の乗り方について訓練を行ったり支援センターの方の話を聞いたりして学ぶ中で、安全に対する意識を高めることができた。	B b	○今後も地域、保護者、各関係機関等との連携を密にして、子どもの安全を守っていく。特に本校特有の危機管理である「熊への対応」については、児童の安全を第一に保護者の理解を深めながら進めていく。 ○児童登校班への指導を綿密に行い、通学路の安全点検を保護者と協力して実施していく。 ○来年度は「安心の家」への挨拶を児童と共に行う予定である。
		○管理責任場所の日常的な整頓及び異状の有無の確認	○定期的に危険箇所の点検がなされ、安全への配慮が十分であったか ○教師自ら校舎内外の環境を整え、子どもと共に整備活動を実践したか	○管理分担場所について安全点検を毎月月初めに定期的に行い、異状箇所については早期に修繕をするように心がけた。 ○校舎内外の分担された箇所の整理整頓を心がけ、必要に応じて職員作業等を行い環境を整えた。	B b	○校舎内外の環境整備を心がけ、必要に応じて職員作業などで不要物の処分等を行う。 ○点検日以外も危険を伴うことについては職員間での「報・連・相」そして「確認」を徹底し、常に学校を安全な場とする。
	地域との連携	○信頼を深め共に歩む家庭・地域との連携	○各領域に地域の方々を招聘し、豊かな経験や磨かれた技術を学習に生かし、教育効果を上げることができたか ○学校林に関わって、地域の方々と連携を図りながら、「学びの森」づくりに向かうことができたか	○コロナ禍、地域の方々にご来校いただく機会が減ってしまっていたが、本年度は学校行事、各学年の取り組み等で地域の方を講師に招いて学ぶことで子どもたちの学びがより深いものとなった。 ○読み聞かせの会、バラボランティアの皆様とは、特に深い交流が出来た。 ○地域ボランティアの方々のお力をお借りし、今年も学校の環境整備を行った。林間の奥や斜面の草刈りも行っていただいたことで、林間での子どもたちの活動がさらに広がった。	B b	○地域に開かれた学校、地域と共に歩む学校として、地域の方々との連携を今後も大切にしていく。 ○「学びの森づくり」に向けてさらに地域との連携を図りたい。
	研	○教師としての資質向上をめざした	○授業公開や学年会の時間を有効に使い、互いに学び合ったり、知恵	○「教育課程研究協議会小学校理科」の会場校として、上伊那郡内・木曽か	B	○学習指導研究会、学年会を中心に、互いに学び合える職員集団作りに努め

	修	研修・研鑽	を出し合ったり、工夫し合ったりして指導に生かすことができたか ○自己課題を持ち、専門的な教養や技術を身につけるよう心がけたか ○非違行為防止に努め、研修を行ったか		ら６０人ほどの参観者に６年「食物連鎖」についての授業を公開した。実際に林間で動物のフンを調べたり、カメラを設置して夜間に訪れる動物を調べたりするなど体験を通した学びに参観者から驚きの声が上がった。 ○非違行為防止・危機管理について、職員会議ごとに校長から職員に指導を行い、研修を深めた。特にスクールセクハラについては資料をもとに職員が小グループで考え合い絶対に起こしてはならないことと全職員で誓い合った。	b	る。 ○非違行為防止研修を引き続き行い、職員一人一人がしっかりと意識して児童が安心して学ぶことができる環境を作っていく。